

小諸を去る辞 (草稿より)

浅間山下 寒 水 印

昨三十三年春 吾諏訪湖辺の人にわかれて 落魂一度び浅間山麓に來たりし以來 春風秋雨、回顧すれば既に一星霜の夢を結びにけり。而かも運命の魔神は刻々と吾を駆り 吾をして長へにこの愛着の郷に止まるを得ざらしむ。人生のこと 過ぐればやがてうたかたの 其果敢なさはいづれか一夜の夢にあらざらん。さはれ 過去一年間の小諸における吾一身の歴史は げに忘れんとして忘るべからざるものなりけり。而かも吾れ 今まさに 小諸を去らざるべからず。

あゝ吾れ 又遂に小諸を去らざるべからざるか。

なつかしき哉 小諸の土地よ。御身の四周をめぐれる山と水と。御身の身辺をかざれる森と花と。御身の上をながるゝ清涼の空気と。而して御身が生みたるあどけなき少年少女と。御身の中に峙ち見ゆる小諸小学校の建物と。而して又特に尚吾が受け持ち百三十人の少年を教へたる薄暗き土蔵と。これらのものは 過去一年の間 吾朝夕の友として吾が心身を養ひつゝ 堪へ難き吾が萬斜の情懷に 暫しの安慰を与えたる伴侶

なりき。

思ひぞ出づるこそ四月 世は新春の風いとやわらかに吹き渡りて
人々楽しき野辺に袂を聯ぬる頃しも 吾は諏訪湖辺に於ける多くの知友
に別れ 吾が教へ子と別れ 吾が老親を後にし 丈夫の眼底もさすがに
とめあえぬ萬斛の涕涙を強いて吾が胸憶になでおろしつゝ 春まだ寒き
和田嶺の頂に残んの雪を践みにき。其の忘れ難きは其の出発の前後なり。
一夜 四人と別を湖畔の旗亭に惜しむ。

月騰 君に別かるゝ恨み哉

三村

酌めや君 東綿嶺（和田峠）を 出づれば故人無し

全

白蝶の 一つあぶなし 花いばら

吹雪

西曆二千年春巴屋楼上に君を送る

国粹

君行くや 南山のいづれぞと 人は問ふ

凡水

行けよ君 渾円球上 月照らず

生々

山川を 遠く隔つる別れ路を 隔てぬ君に 惜しむけふ哉

同

行けや君 浅間の原に 汽車走る

國粹

行けや君 千曲の流れ 水清し

國粹

行けや君 関八山川に 霞立つ

國粹

行けや君 望月の 駒嘶くことしきりなり

國粹

行けや君 川上のそば 三千丈

國粹

行けや君 御牧原に馬 肥えたり

玲瓏

いざや行け 其の勢いで 五大州

同

子弟に代わりて

國粹

師の君の 去りにしあとは 如何にして故郷の春の 花を眺めん

去歳のけふ わらじのひもと うたひてし 師の君のけふ越ゆる悲しさ

別れ路の 吾に句も無き涙哉

寒水

いざさらば 家郷の山よ さきくあれ

諏訪のうみの よし其水はかはくとも 胸の涙ぞ ひるよしも無き

酒に酔うて 君に別るゝ月朧

寒水

多謝す 吾が知己よ。滔々の社会は遂に此の狂漢を容れずと雖も、吾が友 吾が生

徒未だ全く家庭に於ける此の薄幸の頑児を棄てざるなり。

四月五日 船を浮かべて 湖上に吾を送りしもの吾が友玲瓏及生徒数名春色満天

春波揚々 時を放てば 高島城の残塁屹然として聳えたる彼方かすみ込めたる東の

半空に浮かび出づる富峰の姿なんぞそのうるわしくしてけ高きや。

行くもの送るもの 主客只 恍として一幅の画中に遊びつゝ 浩歌低吟
舷を打ちて相答ふの時 扁舟水を切て只其の行くことの速なるを恨みけり。や
がて和田嶺の麓に別れし時 残るもの只袂を以てその面を蔽ふ。行くもの杖を
挙げて吟じき。

十里家山不容吾 又抱狂骨上征途

かくして吾は其の後一年間を浅間山下に暮すべく 小諸停車場に下りき。
諸君は熟知す、師範卒業後五年以内に他郡へ転任するものは是非とも公売処分
を受けねばならぬことを。あゝ公売処分 この一語 諸君は聞いて直に其の何
の意味たるを解するならん。

吾れ 職を育英の任に受て 魯鈍 人を教ゆるの方を知らず また世を渡
るの道を解せず 身を処する 疎狂 人に容れられず また人を容れず 幾
度か失敗と暗黒と悔恨の歴史を閲して 猶且 信濃教育界に最後の討死を遂
ぐることをなし得ず。公売処分者となりて 更に綿嶺を越ゆるの陋を演ずるに
至りては 吾自ら恥を知らざるの甚だしきを笑ひたること 只一再のみなら
ず。

諸君よ。僕の如きものは 実際過去において 信濃の教育界に討死を遂ぐべ
きものたりしなり。所々の戦場に数々の手負いを受けて 更に亦転戦を企つる

ことの如何に陋なるかは 吾も亦之を知りながら 而かも吾をして遂に浅間山下に来たらしめたるは 実に吾が知己の一言なりき。

余は学友読者中の吾が知己諸君に向かつて白状す。

諸君よ

天事、人事、多くは吾に非にして轆轤落魄 此事と志 違うを見て去年春(吾友矢島兄等の忠言に感泣したる結果) 僕は 実際吾胸中に 或る一種の企図と最後の決心を起したりき。思ふにかの時 僕にして若しその企図に従ひて生涯の進路を撰ばしめば 事成らずして終わるも亦玉碎の感ありしなり。否 少なくとも 信濃教育界の小諸小学校における吾が恥辱だけを少うするを得たりけんものを。

丈夫由来耻瓦全 長らへば恥多かるべき人の世よ。

さはれ 人生は意気に感ず。去年春 諏訪に在りて伴野文太郎兄よりの書を得たり。

曰く 来たりて 小諸学校に吾が事業を助けよと。吾れ 魯鈍にして世の勢利を追うて趨るの道を知らずと雖も 又多少一片の意気 知己に許すの義を知らざるに非ず。吾れ 過去に於て伴野兄を知りたること只一回のみなりしと雖も 肝胆の相照は爾来まことに一見旧知の感ありしなり。吾れ 稻荷山に於て

せし君の経綸を知る。また略　小諸小学校在来の歴史を知る。又況んや小諸小学校に吾知己依田（天籟）風馬兄等の在るを知るに於てをや。幾多他郷よりの招きは皆之を拒絶したるにかゝはらず　吾は一諾　単鞋　飄然として小諸の校門に入りしこと　他の人より見れば　如何に軽率にして又耻知らぬわざなりけん。

過ぐれば早き年月よ。げに光陰は千曲の流よりも速にして吾れこの地に来たりてより既に一年の日子を閲して今や吾が小諸生活の局を結ばんとするに臨み首をめぐらして過ぎこし方を見返れば感懐まことに少からざるものあり。

吾れ此地に来たりし時　小諸学校の事　荒廢　真におどろくべきものあり。改むべきもの　進むべきもの　怪力以て断つべきの乱麻　誠に少なしとなさざりき。天若し吾伴野兄の快腕を借りて此難局の革新に資するならんには　吾不似肖と雖も亦一肥臂をこゝに効さんことを独り心に誓ひたりき。然るを・・・・・・何事ぞ　時　伴野兄等に利あらずして　初め相共に臂を把りたる同人は　去年十二月に至りて俄然四散。　吾独り碌々の身軀を浅間山下に止むるの運に及びき。　思ひ起こす　今年正月　人は新年の屠蘇に酔ふの時　吾は与良守三郎君と共に涙にまじる三杯の酒を飲みかはして好漢伴野兄の南行を送りき。

丈夫の胸中知る人ぞ知る吾此一片の衷情に至りては吾知己伴野兄等よく之を解す。又敢て弁ずるの贅を須ひざるなり。只喜ぶ 人知れぬ伴野兄等が小諸学校根本的革新に関する苦慮経営は 其の去りたる後に及んで着々現実に表はれ 加之 教育社界の一方に煥焉たる正義の光は炎々消し難くして佞人の佞を焼きたる結果今又こゝに有為の新校長以下多数の敏腕家を得て積年の乱麻を一朝に断つべき機運を迎ふるに至れることを。世は濁れり 道は衰へたり。而かも教育界中一片の正義未だ消磨悉さずして 小諸学校における黒暗々の夜中 遂に東天の白光を迎へたるを僕は諸君と共に喜ばざるを得ず。

語れば長し。いざや更に吾が小諸においてせし一ケ年間 懐旧の夢を繰り返さんか。

咲きいでし教への庭の梅が香の清き心を誰か見るらんと。昔の吾が教へ子が北の方より送り呉れし白梅の花三輪をはりつけたる去年四月の日記帳のあたり 春風まさに懐古の園に立ち初むるの候 よみもて行けば なつかしの記事もいと多かり。

余の 初めて小諸に来しや 依田(天籟)風馬兄上京前 尚此地に在りき。思へばゆかしく忘れ難きその頃の生活よ。

春まだ浅き懐古の園に杖を曳きて 落魄の放浪生が樹下に低吟を嘯くとき

客魂屢々故山の花に飛び 思いは常に南雲北天に馳せて 別れにし人を思ふの情懷 自ら禁じ難く 独り瞑想到に沈みしことも少なからざりしが 当時小諸の山と水とは日夜我を慰めて已まざりき。

友は書を寄せて吾を弔するに小諸学校の扮擾を以てせしが 吾れは實際是種の事を以て多く吾が意に介せず 懐古の樹蔭俯仰独歩 身は乾坤の一布衣として悠々 想を天外の雲に馳せつゝありしが 自ら少しく人生の問題につきて解決を得しはこの時に初まりしを覚ゆ。

爛漫たる哉 懐古園の花。想ふ昨年の四月の末 細々の春雨新に晴れて 花下淡紅の滴 霜に湿ふの時 一日早辰杖を曳て依田(天籟)風馬・岡村天機の二兄とその残墨にたちしこと。又思ふ 一夜月色朧として酔月城裏 春光淡きこと夢の如くなるの夕 藤村島崎先生と園中を逍遙しつゝ花下に温雅なる詩的趣味を聞くを得たりしこと。今や天機去て天龍河畔に蓼山將軍を資け (天籟)風馬先んじて茗溪の学窓に入り 而して吾又まさに慕はしの詩星にわかれて其の跡を追はんとす。熟々思えば生れて齢を積むこと既に廿有五。吾が前半生は悉く是れ悔恨・不如意・蹉跎 暗澹の歴史なりけり。今より来るべき後半生は果たして如何。老父故国の情を棄て、長く東西に颯零すること吉か凶か。吾知らず。人各々命あり 天若し吾に命ずるに信濃の山中に止まるべきを以てせ

ば 吾は之れに従はん。天若し吾に命ずるに 乞食の生涯を送るべきを以てせば 吾は是れに従はん。天若し吾に命ずるに 関八州の平野に馳すべきを以てせば 吾は是れに従はん。天若し吾に命ずるに 太平洋の波濤に乗るべきを以てせば 吾は是れに従はん。天若し吾に命ずるに 巴里城頭に吟ずべきを以てせば 吾は是れに従はん。まゝよ 正義の駒に鞭て世の戦場に戦はんのみ。人各命あり 人各天職あり。 是の如きのみ。

懐古の楼はうるはしけれど 吾は更に大にその園中の山桜を愛しき。爛漫の花既に去て五月の初 亭たる老松の間 峻たる峡谷の崖上 淡々の色をこらせるもの 風姿清楚宛然 是れ都門の軽薄に穢されざる山中高節の烈女に對するが如し。

吾は深く 古人の大和心を詠ずるに 吉野桜を以てせずして 特に朝日に匂う山桜を唱説したるの高見に服せざるを得ず。

山桜又既に辞するや懐古の樹蔭溪間は そこゝ咲き乱れたる山吹と 崖上に垂れかゝれるゆかりの色の藤の花とを以て 杖ひく足もうづもれんばかりなる面白さよ。 晩春と初夏との間 我は吾が学校の教え子及折々は音づれくれし親しき友と共に この虚飾なきエデンの園に楽天の歌をうたひつゝありき。 思えば罪無き生活なりしよ。

樂しかりしは其晩春の修学旅行なりき。行を共にせしもの三百人、吾れ自ら吾少年軍に將として咄喊。小諸の停車場を出発せしときの勇ましき。あるは春日山頭、眸を日本海上の白帆に馳て越州の山河を指し、古英雄の壮図を談じ、あるは北海の豪濤に脚を洗はせつゝ真砂の上に鱒の網を引き、而して直江津の客舎に、吾が愛々の児等と一夜の夢を結びたること、何れか忘れがたき思い出にあらざらん。

又嘗て生徒を率ひて上田町に赤十字總會の演習を見、帰途月を踏で小諸町に入りし時、浩歌朗吟、吾党少年の意気如何にけなげなりしよ。

袴腰の城址・布引の奇岩・虚空蔵の山嶺・菱野の山中、数え来れば小諸四周の山河、皆是れ吾れと吾兒等とを結び付くる懐旧の媒ならぬは無し。

春去り、夏を迎ふるに及びて、懐古の緑蔭と千曲の清流とは、常に吾を慰めつゝ、吾をして炎熱の何物たるを知らざらしむるに余りありき。

水を泳ぎ船を操って海国児の骨を固むるは、余が吾党の少年を率ゆる主義の一綱領なりき。此故に余は屢々児等を率いて水泳を千曲の河に試みしめしが、吾水泳部長小平英、衆を督して練習頗るつとめき。夕陽袴腰の彼方に没して、晚風恰も吾体によろしき時、中棚の鉞泉に一浴して、涼を戻橋の欄頭に取るの快味に至りては、一度之を試みざるものゝ到底知るあたわざるところ。東都

の吾友 矢島・吉田・岩波等来たりて起居を共にしたるも亦この頃の事なりき。
あゝなつかしの千曲の水や。殊に又御身の下流 両雄の古戦場たる善光寺平に
は 吾がしたはしの人を住ましめ 流れは遠く越州の野をうるほして 遂に
日本海の豪濤に注ぐを思ふに於てをや。

卓抜なる哉 立科の連山。御身の彼方は吾なつかしの故郷にして吾が祖母及
慈母が永眠の墳墓を置くところ。花晨月夕 眸を馳せては 其の山嶺に聯想し
つゝ うつゝに夢に 故山の吾老親と吾子ならぬ愛児とを思い浮かべたるこ
ど幾度ぞ。

雄麗なる哉浅間の岳。御身が吐き出すところの長烟に向つて日夕吾が胸間の
磊塊を寄せつゝ自ら禁じ難き不平を慰めしこと幾何ぞ。殊に況や昨夏同人と共
に 吾が足跡を御身の焼け砂に印し 杖を御身の噴火口縁に立てゝ 造化の
大工を探りたることあるに於てをや。

跌宕なる哉 追分の原。秋風一度立て天高氣清 御牧の原頭 馬まさに肥ゆ
るの候 吾は吾が少年軍と一日の遠足を追分に企てき。野草遠く連なりて百花
何ぞ繚乱たるや。方数里の原野 旗すゝき風になびける只中に 今や近衛の
壮士八百 其の砲車を軋らして実弾演習を試むるなり。何等の壮ぞ。何等の
快ぞ。吾党潑々の少年 心骨豈躍らざらん。語り出でゝは 今尚腕を扼せしむ

べき 吾が生徒等の話の種なり。

うるはしき哉堆氷の紅葉 秋やうやく長けて四山霜に染まる候 一日吾れ
藤村先生に具して堆氷の新道を辿りき。天候快晴 十里一目。見渡せば谷のく
ま 山の峰 只紅黄と緑と織り交ぜたる錦繡にあらぬは無し。脚底に清泉を掬
で 団子を熊の平の茶店に命じつゝ身は宛として雲外の仙宮に遊ぶの情味、何
れの日にか忘るゝを得べき。

吾高等一、二年の男女生徒と共に太平に於て催ふしたる十一月一日の運動会
よ。げにいぢらしきは彼等小国民の意気なりけり。旭旗は太郎山上に翻々とし
て 喊声屢々松林の間に起こるの時 無心の少年少女が彼等の先生と共に
如何に甲斐々々しく走り 如何に健気に角力せしかよ。やがて校庭に万歳を三
呼して喝采声裏に解散せしが 彼らが活潑々地 些も憊倦の歩調を見せず
笑ましげに満面の喜悦を以て校門を出づるを見送りたる時 吾心中のうれし
さ。

浅間下しの吹き荒れて 千曲の水音 やうやう寒き冬枯れの候に到りては
訪う人もいと稀に 自ら異郷飄零の身を憐れむの情に堪えざりしが かくて
も吾はかの土蔵の中 吾児童と共に情は寒からぬ団欒の一炉を囲みて 古へ
勇將の伝記に雪の晨を物語り あるは角力 陣取り 球投げ 遠足 さては

懐古園の大雪戦などに休業時間を娯しみき。加之この頃は やさしき吾が教へ子が吾ために編みて送りし毛糸の足袋に 人情の寒さを防ぎつゝありき。

くり返しては 又更に忍び出づるは かの壁おちかゝれる土蔵なり。吾れの小諸学校に赴任以来経営皆齟齬、事妨げられ言行われず、一日として安かるべき日は無かりしが 殊に去年冬 吾が校内に正義の光 踏みじられて暗黒の現象を呈したるとき 余りの馬鹿々々しさに、吾は学校を去るべき一種の決心を固めつゝ、一日吾が教室に臨みしが 見渡せば百余の児童(皆是可憐の天使)、「皆」(只)無心にして吾を便らんとすべき顔容を見て 吾は吾が決心の 此児童(愛児等)に対して如何に其残忍なりしを悟りつゝ 白墨を執つて塗板に向かひたる吾が双眼の忽ち涙にくもるを覚えざりき。生徒は吾を詰るに 何の故なるかを以てしき。吾は吾亡き母の事を思い出でたるにまぎらしつつ 書を抛て 教員室に走り(人知らぬ間を)「つゝ」思う存分に泣きたることありき。かの時吾を去らしめざりしは 慥に吾が生徒(百余人)のためなりしよ。

彼らは余を慰めんとして塵土堆積の教室を清めき。彼等が余を慰めんとして同級会議を開きつゝ級中の整頓を議したることありしよ。嘗て小使の無かりし時 彼らが我が命に従ひて(吾命を待たずして) 如何に殊勝に働きしよ。彼らは火を起し 水を荷ない 湯を沸かし 茶を入れて 外来の先生を接待しき。

我が生徒間に当選されたる八人の艦長 即ち部長（級中を八部に分ち其の各部を命ずるに朝日・富士等の軍艦名を以てしたりき）が如何に奮勵して誠意誠心余が授業を補助し 如何によくその部下を指揮せしよ。

去らんとするに臨みて回顧するとき 薄暗き土蔵に向かつて吾が胸底に湧き出づる懐旧は げに人知れぬ思あるなり。とがむるなかれ世の人よ。彼処は実に吾一年間吾兒童と 共に憂い 共に喜び 共に泣き 共に笑ひたる遺跡なるものを！

長々しき愚痴とは知れど（長々しき愚痴よと笑はゞ笑へ）。吾は馬場町における吾寓居を記さゞれば 小諸における吾が懐旧の文を結ぶ能はず。

追分の原頭を馳せて汽車に乗る人は 其のまさに小諸停車場に入らんとするとき 左の窓に首を延べて 願はくは一個のはねつるべに注目せよ。春さりくれば 井戸の辺にあやめ草、あやめづしらしく萌え出づべき西岡家北窓の一室 朝た夕べに起るべき詩的の現象は かたるも長し。こゝ放浪の落魄生がしばしの安慰を得たるホームなりしよ。思へば過ぐる一年間 吾が寓居における老婦人が 母にも勝るやさしさを以て 吾を待し呉れたる厚きなさけを。人は知らじ。東京より 諏訪より 来訪せし幾多の吾友が 懐古の園を探りて中棚の清泉に浴し 天香閣の欄頭に凭りて浅間の長烟を望みつゝ 歸りて明窓

に清談を試みしとき 友が如何に満足して明朝小諸ステーションを出発せしかよ。

（殊に又一月以来は情懷特に隔てなき、吾友朝倉君と起居を共にして 慰められつ慰めつ 嚴冬机を囲みてかの中学入学の志願生等を教へたること。）

去年夏吾れ「るーまちす」を病みて北窓に伸吟せしとき 生徒の総代数名は来りて、吾を枕頭に慰め呉れしこと、暮秋 吾童子等と門前の柿の木によぢ昇りて柿の実をかぢりたること。若しくは小春日ののどけき吾が庭前の老梅に「ハンモック」を掛け 仁顔の可憐児を乗せて 其の上にゆすふせらしめしこと（殊に又一月以來云々） など忘れめや、など忘れめや。

生徒と遠足を約せしとき 黎明彼等の来たりて吾を迎へ門前を叩きしとき 吾脚の如何に軽く追分原頭に向かつて跳びしかよ。一日降雪四尺 門前人絶えて風雪霏々 而かもこの日早晨 この雪を分けて吾が数名の児童は吾を迎へき 吾は自ら彼等の衣雪を払うて其の手に息吹き 彼等をして相共に団欒の炬燵に物語らしめき。

更に思ひ出づるは小諸ステーションなり。あゝステーション ステーション。御身の「プラットホーム」に 幾たび吾は吾が知己を迎へつ 又之れを送りしかよ。去春一夜吾れ初めて小諸停車場に入りしとき 終列車の燈下に其

さびしさをかこちたりし小諸ステーションよ。今將た去り難きよしみを吾心に
思い出でしむるは何のゆかりぞ。(ゑにしぞ)

かの富士見坂の踏切りに弁当箱をつるしながら、折々は南天に玲瓏の芙蓉を
望みつゝ幾度吾は詩的の瞑想に(浅からぬ瞑想に)耽りしよ。夜は深けて寒月只
数条のレールを照しつゝ暗中色燈の晃々たるかの忘れ難き踏切りよ。時雨ぞそ
ぼつ秋のくれ かの木欄にもたれつゝ無心に汽車の黒烟を見送るは誰が子ぞ。
あゝ此汽車よ。御身はまさに吾をのせて此なつかしの小諸を去らしめんとす
るか。(去らざるべからざるか。)あゝ吾れ遂に小諸を去らざるべからざるか。

春風今や浅岳のまともをかすめて懐古の園裏 花まさに笑はんとするの候
吾は遂に、此愛着の土に別れざるを得ざるなり。都の花は既に散りぬ。都の花
に後れにしこと露惜しからねど 天何ぞ吾をして小諸の花に(信濃の花に)そ
むかしむるや。言ふ勿れ 人各々命あり。人各々命あり。

吾れの小諸に対する罪に至りては誠に多し。而かも小諸の山河と 小諸の知
己と 而して彼の愛々の児童と 過去一ケ年間住ましめ吾を養ひ呉れたる(厚
き交誼と)うるはしきなさけと「交誼の厚き」に至りては 感佩多々。吾只魯鈍
にして其の知遇にそむかんことを畏るゝのみ。

俯仰回顧 信濃教育会における吾三ケ年間の歴史を思へば 恍として只夢

の如し。小諸を去らんとするに鑑みて感慨(懐)まことに浅からず。詠む人只痴人の痴話(語)として一笑に附すること無くんば幸甚。

さらば浅間の山。さらば千曲の水。さらば小諸の知己。さらば吾(小諸小)学校の諸君。さらば吾が教への庭の子等。(さらば信濃に於ける吾友及吾教へ子の総て。)

さらばよ故国(信濃)の山河。健在なれ。いざ別れん哉。

明治三十四年四月十二日

伊藤 長七

四月十二日小諸町の寓居に此の文を草して懐にしつゝ十五日朝一声の汽笛と共に停車場裡 吾は小諸の人々及生徒等に別れ、無限の感を汽車の黒烟に残して、伴野・笹岡・仁科・春日・平沢の諸友(君)と共に上京の途に就きしが、今や身は既に茗溪の橋畔にあり。学窓独り浅間山と諏訪湖の写真を掲げて 夢魂屢々かの児等と手を故国の山河に携ふ。今日しも友と杖を不忍池畔に曳て新緑の上野を漫步せしが 帰来吾机上に得たる朝倉・小林二君及小諸の児等よりの書中封入するところ吾が旧居の梅花及び酔月城裡の花三輪 児等の一人がかざりなき文に曰く、このさくらの花まことにすこしには御座候が 先生に奉らんとて 今朝学校へ参りがけに わ

ざわざたをし折りて 先生の東京にて吾が懐古園をお思い出しまでにさしあげ候間 受取り下されたく候、と。あゝ 友の情 何等のやさしさぞ。児等の心ばせ 何等のしほらしさぞ。殊に又この日吾友宮沢国粹兄及北沢種一君の客書を得たり。国粹兄覇氣 年を経て愈々雄健 人と土地とに感激する深き情懷は旧によりて慕ふべく。今や征衣を長野の春風に翻して而かも夙夜に家国生民を慨するの氣魂(書中に溢れ) まことに惰夫をして起たしむるものあり。北沢君は吾と同郷 心情高潔。氣骨稜々として古人の風あり。まことに教育会中 得易からざるの好漢。今や師範の新卒として年少氣鋭磊々の雄心を持して 北安の大町にあり。この日寄するところの君が書中 吾友松沢兄等と木崎湖畔に斯道を画策するの福音を聞くを得たり。あはれ うれしき哉 故人の情。今や吾れ車馬雑踏の巷に立ちて 街頭に紅塵を呼吸しつゝ 晨夕都門の輕薄に耳目を犯さるゝの際涼風一陣吾脳裡の塵垢を洗除して涓々の清泉を掬するの想あらしむるものは実に郷国の人の情けなりけり。

あゝ信濃の江山。あゝ信濃の人。この人を伴としてこの江山の裡に「悠々」吾が志を養ひつゝ 悠々育英の至樂を味わうこと 亦可ならずや。自ら訪うて曰く、汝それ何を苦んでか、汝が信濃の老親にそむき(老親を

残し) 汝が信濃の樂園を棄て 汝が信濃の可憐児を残し(後にし) 汝が信濃の江山を後にし (江山にそむき)出で、 営々の巷に奔馳するの陋を演ずるぞ。遂に自ら答ふること能はざるなり。

此の夜 学窓燈下(学窓に) 弧座沈思 転た無限の感慨に耽る。窓を排して眺むれば 半輪の淡月 おぼろにニコライの尖塔にかゝりて お茶の水のおそぎくら 堤上に片々たり。あゝ 落花 有情 流水 意なきにあらず。人間豈に涙無からんや。

長七先生の草稿よりこれを印字す。『学友』に発表されたるものと多少の相違あり。

小山 登